

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26870579

研究課題名(和文)「植物的自律性」の思想とドイツ・ロマン主義

研究課題名(英文)Autonomie der Pflanze in der deutschen Romantik

研究代表者

武田 利勝 (TAKEDA, TOSHIKATSU)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80367002

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ・ロマン派の理論的指導者の一人であるフリードリヒ・シュレーゲルが自らの哲学のシステムを植物的なそれと特徴づけたことに着目し、彼の講義『超越論的哲学』において記述モデルとされた化学的実験の方法の中からいかにして有機的・植物的な体系が生成してくるかをたどった。また、シュレーゲルの先行者としてヨハン・ゴットフリート・ヘルダーにも注目し、その代表的著作『イデエーン』において、植物的有機体が単に自然の事物としてではなく、自然史全体の成長モデルとして記述されていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main aim of this research was to explain the idea of the philosophical system as "die vegetabilische Organisation" in the romantic era. With regard to this concept I have analyzed on the one hand Friedrich Schlegels "Transzendentalphilosophie", which follows the method of chemical experiment and yet produces genetically den "pflanzhaften Organismus". On the other hand the research treated of "das vegetabilische Wachsen" in J. G. Herders "Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit". Here the vegetabilia prove to be the system of prosperity in the human beings and shall decide totally the history of whole nature.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：自然哲学 自律性美学 ヘルダーの有機体論 ドイツ・ロマン主義

1. 研究開始当初の背景

報告者は、初期ロマン派におけるもっとも重要な理論的指導者の一人とされるフリードリヒ・シュレーゲルを中心として、1800年前後のドイツにおける美学・自然哲学・文学を研究の対象としてきた。そしてこの時期に書かれた種々のテクストを読解するなかで、とりわけ18世紀後半以降、芸術作品を一つの有機体と見なす新たな思想が胎動していることが確認され、しかもとりわけ、それらが植物的有機体をモデルとしていることが明らかになってきた。ただし、先行するほとんどの研究においてそれらは芸術有機体説の一事例として扱われるのみであって、そのようなものとして、ロマン派およびドイツ観念論における特殊な美的関心のなかに制限されたままであった。

ロマン派の諸ジャンルにわたるテクストにおいて描出・表現される植物のイメージはしかし、よく言われるような「装飾」「アラベスク」といった美的表象にとどまるものではなく、「断片」や「カオス」といった、ロマン派独自の世界観に深く通ずるものがあると思われる。このような関心を背景として、本研究は開始されている。

2. 研究の目的

フリードリヒ・シュレーゲルをはじめとするロマン派の思想家・詩人たちにおいて「植物」のイメージが有する重要な意味を明らかにしたうえで、それを西洋思想史のなかに位置付けること、これが本研究の目的である。

(1) 伝統的な植物観

アリストテレス以来の西洋の伝統的な自然観(自然の階梯)において、植物はかならず動物の下位に置かれてきた。もちろんそのヒエラルキーの最上位には動物の最終的発展段階としての人間が位置しているが、こうした位階の違いを規定するのは、それぞれの有機体が有する「自律性」の度合いである。すなわち動物が自由に移動し、自らの環境に積極的に働きかけることによって自律的な生を楽しむのに対して、植物は移動することも、あるいはほとんどの場合、活動的に環境に働きかけることもできない、と言う意味で自律性を有さない。

こうした位階的な差異のうちに、伝統的な自然の目的論が生じることとなる。すなわち能動性・活動性を備えた動物的有機体は自らのうちに目的を持っているのに対し、受動性をその特質とする植物は他者のうちに目的を持つ、すなわち他律的な道具の位置に甘んじる。こうして西洋的思考において、植物は支配の対象として、あるいは人間にとっての異質な他者として扱われることとなる。これを敷衍すれば、近代的合理主義における「自

然」観念は、植物というイメージによって代表されることになる。

(2) 動物的システムと植物的システム

動物と植物との上記のような有機構成上の違いは、相異なる二つの哲学的システムのためのモデルとなっている。例えばカントは『純粹理性批判』において、己の哲学体系を「動物的身体」を備えたものとして説明している。それは自律的・完結的な論理体系であり、さらにここでの「動物」がその最高位にある種としての「人間」を含意していることを考慮すれば、古代以来しばしば言及される通り、一切の形態のシンメトリーは人間の身体におけるそれを規範としているはずなのであるから、カントの言う「動物的身体」を備えた哲学体系たるもの、やはり同様にそのようなシンメトリーによって構成されていなくてはならない。

哲学的思考が備えるべくカントによって要求された動物的システムは、このように自己完結的、閉鎖的、自律的である。そして近代以降、哲学はそのようなものである限りにおいて、論理的にして正当なものと思なされることになる。

そうであるからは、これと対立的なものであらざるを得ない植物的システムは、非自律的、非閉鎖的なものとして、哲学的思考からは排除されざるを得なくなってしまう。それにもかかわらず、フリードリヒ・シュレーゲルによれば、「最高の、もっとも完全な生とは、純粋な植物的生にほかならない」のであり、そればかりか彼はさらにはっきりと、「動物的有機構成」よりも「植物的有機構成」の方に哲学的思考のモデルとしての優位性を見出している。

このことから、能動性・活動性・完結性を主たる尺度として展開してきた西洋哲学によって他者として排除されてきたある種の思想的系譜を、植物的な受動性・非活動性・開放性を導きの系としながら手繰り寄せ、その際の重要な契機としてロマン派を再評価することが可能であると思われる。

以上のような大目的に向けて、本研究ではロマン派を中心とする1800年前後のドイツ思想における植物的有機体の表象を分析し、その思想史的意義を考察した。

3. 研究の方法

ロマン派における植物的有機体の概念を思想史的に再評価するべく本研究が取った方法は凡そ以下の通りである。(1)ロマン派以前の時代、とりわけヨハン・ゴットフリート・ヘルダーにおける同様の思想を分析し、(2)フリードリヒ・シュレーゲルにおける有機体思想がそれらの影響下どのように発生し、独自の展開を見せたのかをたどり、その

傍ら、(3)西洋思想の伝統において植物表象がどのような変遷をたどっているかを研究した。

(1)ヘルダーにおける植物概念

近代的な歴史哲学を基礎づけた最重要の思想家の一人として評価されるヘルダーは、さまざまな文脈において植物を例に出しており、これまでもいくつかの研究がそれに言及してきた。しかし、後に例えばヘーゲルによって構想された歴史哲学も、あるいはその論理学も、歴史の流れや論理の展開を植物的生長になぞらえていることは周知のとおりであり、特定の事物を発展史的にとらえるに際して植物的生長モデルをそこに重ねること自体は、ヘルダーにおいてもやはり、決して奇異なことではない。

本研究の関心は、そのような発展史的モデルとしての植物のイメージではなく、2 - (2)で述べたような、論理的完結性から逃れる異質なシステムとしての植物性をヘルダーのテクストから読み取ることにあったのであり、かかる関心に基づいて、彼の主著『人類史の哲学のための諸構想』(以下、『イデーエン』と略記)、および人間学に関わる諸テクストを分析した。その際、そうしたヘルダーの思想の背景にあるスピノザ的汎神論、およびライプニッツ的なモナドロジーの思想についても種々の先行研究を参考にした。

(2)シュレーゲルにおける有機体思想の展開

ヘルダーからシュレーゲルへの直接的影響を分析した先行研究はほとんど存在しない上に、相互の間には批判的な発言さえ多く見られるにもかかわらず、有機体をめぐる思想的核心において両者は触れ合っており、こうした観点からシュレーゲルを再評価するためには、自然哲学的側面からその思想に迫ることが必要であると思われる。

本研究では特に、イエーナ大学での講義『超越論的哲学』を中心として、1800年前後の世紀転換期におけるシュレーゲルの思想の分析を通じて、有機体思想の展開を探った。

(3)西洋思想における植物表象の変遷

西洋の思想的伝統のなかでの植物表象の変遷を詳述した研究としては、管見の及ぶ限り、H. W. Ingensiep: *Geschichte der Pflanzenseele*. (2001)しか存在しない。報告者は本書を参考として、この問題に関する通史的な知見を得るべく努めた。

4. 研究成果

(1)ヘルダー研究

「自然の大いなるアナロジー」に導かれながら人類の歴史をその有機的生成史から民族の歴史に至るまで全的に記述するというヘルダーの試みは、大著『イデーエン』として

結実した。そこでは自然哲学と歴史哲学を不可分の両輪とした「人間学」が展開されるが、しかしこの論述全体の主役は「人間」ではなく、人間の形成を可能とした自然全体の「力」である。ヘルダーによれば、この「力」が無機物から有機物、そして理性存在としての人間へと自己形成してゆくのであり、そのプロセスの一つとして「植物」も扱われる。

理性存在たる人間へと向かう有機的生成の一過程と見なされる限り、確かに植物は低次の有機体であり、この点についてヘルダーの見解は伝統的な自然階梯論の域を出るものではない。しかし、デカルト的な機械論を刎ねつけ、ライプニッツの力学的・モナド論的自然観、およびエルンスト・プラトナーの動的な生命観を基礎として種々の有機体を考察するヘルダーの場合、植物と動物との違いは機械的に断絶しているのではなく、動物という高次の有機存在のなかには、それに先行する植物的なものが含まれている、といったかたちにおいて、一切は連続的に存在している。そして人間もまたそうした連鎖のなかの一要素であり、決して特権的な位置にあるわけではなく、むしろ先行的有機体としての植物がそのうちに含まれていなければ、人間という有機構成はあり得ないのである。その際、ヘルダーが全有機体に連続的なアナロジーとして見出す植物的なものが、「直立性」である。植物の生長を促進する自然の「力」は、上方を目指して進み、その結果、植物を直立させる。この植物的な「力」が動物において発現したとき、それは直立歩行する人間となって現れる。

ヘルダーのこうした見解は、伝統的な自然階梯論を大きくはみ出るばかりでなく、近代的なダーウィニズムとも一線を画す独特なものであるが、この独自性 一切の自然事物が相互連鎖的に存在することによって大いなる全体が初めて目的論的に構成されるのであって、その逆ではない の核心には、「植物」という形成段階の決定的な捉え方があることが明らかとなった。

なお、ヘルダー研究の成果は、2016年11月に開催される西日本独文学会において発表し、さらに論文として完成させるべく準備中である。

(2) Fr.シュレーゲル研究 『超越論的哲学』という実験

1800年にシュレーゲルがイエーナ大学で行った講義『超越論的哲学』は、彼自身が至るところで繰り返した「哲学は一つの実験である」という命題を、その文言通りに実践した重要な記録として読み直されなくてはならない。ロマン派やドイツ観念論における哲学を一個の実験と結びつけること自体は目新しいことではないにもかかわらず、これまでこうした研究は皆無であった。報告者はこの講義録を、「断片」としての諸概念を実験のための素材として、そして論述全体をその実

験の具体的な手続きとして分析した。

この場合の「実験」とは、18世紀後半に勃興した近代的化学を支えた、要素の分離と結合による中和実験のことである。その手続きはしかし、近世初期の神秘的自然学における錬金術的な手法とほぼ同一であり、シュレーゲルにとって化学的結合の手法は、究極的にいえば、フィヒテ的な自我の観念論をそれと対立的な実在論的自然哲学と結びつけるために有効な唯一の哲学的方法であり、その限りで魔術的な営みでもあった。

このことは、論理的完結性を目指す近代哲学のなかに植物的開放性を導入する試みとしてロマン派哲学を見直す際に重要な手がかりとなることがわかる。例えば『超越論的哲学』講義全体の主要実験の一つでは、実験全体の第一要素として「無限なもの」と「意識」とが抽出されたのち、さらにこれらの分解と結合を通じて、「自然学」が発生する。そもそも観念論的素材を出発点とした実験が「自然学」の産出をもって終わるという点に、実験哲学の魔術的性格があると言えるだろう。

「化学的世紀」から「有機的世紀」へ

従来、シュレーゲルのこうした実験哲学の理念は、彼がノヴァーリスとの共同哲学を通じて親しんだ「アルス・コンビナトリア」の伝統とともに語られることが殆どだったが（例えば J. Neubauer など）本研究では 1780 年代のフランスにおける化学研究との関連を重視しながら、あくまでも一つの自然学的実験の試みとしてシュレーゲルの論述を丹念に検討した。その際、同時期の彼の遺稿断章やアテネウム掲載論文等における「化学」ないし「化学的なもの」に関する言及は、『超越論哲学』における実験がきわめて意図的なものであったことの傍証ともなった。

しかし、シュレーゲルが本講義において化学実験をモデルに自己の哲学を展開したからといって、彼自身がこの学術分野に全面的な信頼を置いていたことにはならない。むしろ彼は、分離・結合・中和を通じて新たなものを産出するこのプロセスを積極的に適用しながらも、その手順の人工性や激烈性に対する深い不信感を抱いていたようである。そのことは、ある断章において、フランス大革命という時代的劇薬こそ 18 世紀という化学的産物である、と断じていることから伺える。

さらに同断章では、「化学的世紀に続くべきは有機的世紀」と言われている。そしてまさにこの世紀転換期に行われた『超越論的哲学』講義において、シュレーゲルは、終わりつつある世紀の特性たる化学を最大限に適用しながら論を展開させ、この結合実験のなかから一つの有機的世界を生じさせようとしたのだが、このことによって彼は、無機物の結合を通じて有機物を産出することを目指した従来の化学を哲学的に実践し

ただけではない。

同講義末尾においてシュレーゲルは、あらゆる「理解」は「発生論的」とであると述べている。この「発生論的」という概念によって、「己の内なるものを他者のうちにも芽生えさせる」営みとしての「伝達」のあり方が説明される。すなわち伝達とは、すでに完成した体系を事実確認的に他者のなかに移しこむのではなく、いまだ生成の途上にある萌芽としての体系が、無限繁殖する植生のように、他者のなかにも芽生えてゆくプロセスのことである。そのような「理解」はつねに「理解不可能性」とともにあり、だからこそ、体系は決して完成にいたることはない。

シュレーゲルの「実験哲学」は、このような「発生論的」営みとしての理解のあり方を旨とした、すぐれて行為遂行的な試みとして評価されるべきであり、そのためには、彼が一群の植物的有機体のように無限繁殖的な相互伝達として哲学を把握していたことを踏まえてはならない。「化学的世紀」から「有機的世紀」へ。この表現はシュレーゲルにとって、化学実験というパフォーマンスを通じた生き生きとした伝達のなかから、それを観察する者たちの内面において新たな思想がそれぞれに芽生えてくる。そのような意味での有機的な営みへと、哲学が開放されてゆくことへの希望なのである。

本研究成果については、九州独文学会（2015年4月、九州大学）およびゲーテ自然科学の集い東京研究会（2016年2月、慶應義塾大学）において報告した。なお、それらの報告を踏まえた研究成果については、『九州ドイツ文学』（2016年10月刊行）に掲載するべく、論文執筆中。

(3) 植物的自律性の思想的系譜

本研究全体にとって唯一の先行研究といってもよい Ingensiep は、アリストテレスから 20 世紀の哲学的人間学に至るまでの哲学的思潮のなかで、「植物霊魂」のモチーフがどのように扱われてきたかを分析している。その長大なモノグラフの末尾において Ingensiep は、西洋哲学史のなかで植物は終始「理性にとっての他者」であったことを明らかにした。本研究もまた、とりわけカント的批判哲学との対比において、ヘルダーおよびシュレーゲルの植物概念に焦点を当てることによって、1800 年前後の一時期、自然哲学と歴史哲学とが交差する中で立ち現れてきた、「理性の他者」としての植物の意味を明らかにした。

しかしながら、彼らの思想は 19 世紀の自然哲学においてはシェリングの、また歴史哲学においてはヘーゲルのそれぞれ影に隠れ、あるいは追いやられてしまったことによって、とりわけシュレーゲルの『超越論的哲学』がそうであるように、その意義も見失われてしまっている。本研究は未完成であるが、「植物的自律性」を軸とした新たな思想史の構築

に向けての一步であったと言える。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

武田利勝 「眼差しが 飲み込まれる
ヴィンケルマンにおける彫像観察の失敗と
その意義をめぐって」九州大学大学院人文科学
研究院『文学研究』113巻, 2015, 31 - 52
頁

[学会発表](計5件)

武田利勝 「哲学という実験 フリード
リヒ・シュレーゲルの有機体思想」ゲーテ自
然科学の集い東京研究会, 2016年2月, 慶
應義塾大学

武田利勝 「旅行文学の解体 初期ロマ
ン派と文学のトポグラフィ」日本独文学会
秋季研究発表会シンポジウム 2015年10月,
鹿児島大学

武田利勝 「植物的自律性の思想」九州大
学独文学会, 2015年4月, 九州大学

Toshikatsu TAKEDA, „Geste der
Grenzueberschreitung“. Das 1.
Internationale Kolloquium des
germanistischen Seimars an der
Universitaet Kyushu. 2015年3月, 九州大
学

Toshikatsu TAKEDA, „Wie kann die
Schoenheit beschrieben werden? K. Ph.
Moritz und Lavater vor dem Apollo im
Belvedere“. 国際シンポジウム, Philosophie
des Geistes und Psychologie um 1800. 2014
年9月, 新潟大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

武田 利勝 (TAKEDA, Toshikatsu)
九州大学人文科学研究院准教授
研究者番号: 80367002